

長野県埋蔵文化財ニュース

No. 31

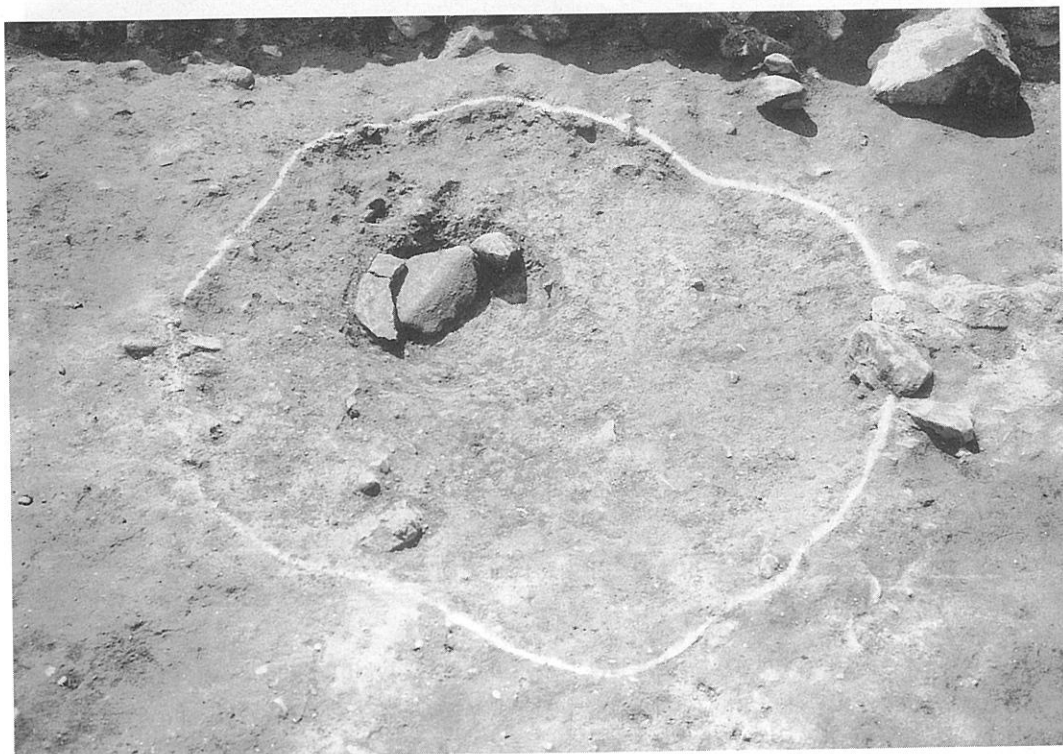
1991.3.20

(財)長野県埋蔵文化財センター

長野調査事務所
〒383 長野市篠ノ井布施高田字佃963-4
TEL 0262-93-5926

平成2年度の発掘調査から

長野調査事務所



向六工遺跡 第26号住居跡（縄文時代早期）

向六工遺跡

向六工遺跡は東条川が形成した東面する河岸段丘上にあり、JR篠ノ井線坂北駅の西方眼下にのぞめる。遺跡は台形に張り出した2万㎡弱の段丘のほぼ全面に広がる。調査は4月4日から20日・7月24日から9月16日までの2回に分かれ、2,800㎡を調査した。昨年度との合計は14,500㎡となり、遺跡全体を調査したのに等しい。

今年度調査した遺構は、住居址8（縄文早期2、平安5、中・近世1）、掘立柱建物址1、柵4、焼土址18（縄文6、中・近世12）、土坑65である。

縄文早期の住居址・26号は径2.2mの円形で浅く、中央に炉が掘り込まれ焼土が残る。柱穴は検出できな

かった。遺物は条痕文土器、石鏃、石匙、凹石、磨石があり、土器は絡条体圧痕文を施され、縄文が伴う。29号は径4.8mの隅丸方形で、明確な炉・柱穴は検出できなかった。土器はごく少量であったが、床面の一部には黒曜石の碎片が集中していた。

平安時代の住居址は合計19軒となった。調査区全体に散在し、切り合うものはない。28号は一辺5.5mの方形で、東壁にカマドをもつ。柱穴は床面に6本あり、東西方向に3個ずつ並ぶ。壁面に焼け炭化材が残る。遺物には光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器が含まれる。土錘が1点出土し、本遺跡では初見である。本址は大形の部類に属し、規模に応じて柱穴のみつからないもの、

壁上から掘り込まれるものなど、バラエティーがある。

中世遺構では、長径約2mの楕円形を呈する1030号土坑から、16世紀前半の美濃焼丸皿が11枚重なって出土した。本址は掘立柱建物址に伴うようである。また、

1048号土坑は、一辺1.5mの方形、深さ60cmの火葬施設で、突出部を2箇所もつ。葬送にかかわる遺構は本遺跡では唯一である。このほか、岩殿寺参道址の検出も期待されたが、明確にならなかった。



石川条里 平安時代水田面全景

石川条里遺跡⑫区

石川条里遺跡は千曲川左岸に形成された自然堤防西側の後背湿地に位置する。⑫区はJ R篠ノ井線稲荷山駅の北東側に当り、古墳時代の祭祀土坑群が検出された微高地の東に隣接している。このため調査した各時代の水田面とも西側がわずかに高い。調査は9月14日から12月7日まで行われ、面積1,600㎡で平面的には江戸・平安・弥生後期の3面、畦畔芯材のみの検出は古墳時代中期・弥生時代中期の2面を調査した。この結果、昭和63年度からの3ヵ年で本線部分7万㎡の調査を終了した。

江戸水田面を調査できたのは⑫区のみで、弘化4年(1847)の善光寺地震による洪水砂に覆われた水田面を検出した。20m以上間隔をあけた幅40cm・高さ10cm程度の畦畔と、これに直交し東西方向に並列する何条もの足跡列が検出された。西端は足跡が途絶えるため、水田域の限界に当たっている可能性もある。

平安時代水田面は仁和4年(888)の大洪水で埋没した水田面で、大畦畔には当らず、東西・南北に区画

された長方形の水田15枚が検出された。田面には足跡と思われる無数の凸凹があり、南西から北東へ、畦畔を突っ切って続くスキ状の痕跡がみられた。同じ方向に1条、水田区画の畦畔よりやや低い痕跡的な畦畔が残っていた。これは昨年度⑫区南側で検出された大畦畔と直交し、また古墳時代中期以前の大畦畔とも同じ走行であり、検討を要するものである。

古墳時代中期の大畦畔は部分的に多くの横木を芯材とし、鋤1点が出土した。弥生時代後期の水田面はビートに覆われ、古墳時代の大畦畔の北側に沿って大畦畔が走り、これにほぼ直交・平行する水田区画がみられる。弥生時代中期の大畦畔は後期の直下にあり、一部はかなり深く方向も若干異にするため、2時期に分れる可能性がある。芯材の最深部に石庖丁が伴った。



(左) 弥生時代後期大型住居跡

篠ノ井遺跡群

中央道長野線の建設工事に伴う篠ノ井遺跡群の調査は、昭和63年度以来調査が続けられ、平成3年度に若干の調査面積を残すものの、平成2年度をもって路線内のほぼ全域の調査を終了することとなる。現時点でわかりうるこの3年間の遺構数は竪穴住居跡822、掘立柱建物跡90、溝跡130、墓跡24、畑跡3、土坑1700である。時代的には縄文時代晩期から中世までを含み、特に弥生時代後期・古墳時代前期・平安時代の遺構がその中心となっている。

篠ノ井遺跡は長野市篠ノ井塩崎に所在し、今年度の調査は約2,300㎡の調査区を平成2年4月4日から10月5日の期間におこなわれた。検出された遺構は竪穴住居跡377、掘立柱建物跡20以上、溝跡50、墓跡13、畑跡3、土坑963であった。

縄文時代晩期の遺構としては土坑墓SM7010が検出されている。SM7010は長径1.3m・短径0.8mのもので小型の埴輪型土器と歯が出土している。

弥生時代中期の遺構については数軒の竪穴住居跡と数基の土坑が検出されている。このうちSK8167からは太型蛤刃石斧と偏平片刃石斧が並べられて置かれたような状態で出土している。

弥生時代後期の遺構・遺物については、特に後期でも後半頃の時期のものが多くようである。検出された遺構数は平安時代の遺構について多いものとなるが、その中でも注目されるものが大型竪穴住居跡SB7488とSB7499である。SB7499はその半分が調査区外となるため詳細については何ともいえないが、SB7488については完掘され柱穴・炉・入口施設などの調査がなされた。その規模は長辺約10m・短辺約5mとなる。この2軒は近接しており、同時に存在したとは考えられず、集落内での同じ性格や役割をもつもので建てかえられたものであろうことを想定させられる。そしてSB7488の埋土中より柳葉式的な弥生時代型式の銅鐻が出土しており、これと類似型式のものが同時期の溝



(右) 畑跡 (平安時代)

の肩部分からも出土している。昨年度調査のものを含めると合計3本となる。

古墳時代の遺構・遺物については前期のものがほとんどである。その集落構成は弥生時代後期の集落よりもやや北方向にずれるようである。また出土する土器の中には北陸・東海・畿内系的なものをも若干含んでいる。また注目すべき遺構については、土坑墓SM7016があり、副葬品として木質が付着した径約5cmの珠文鏡や48個以上の出土をみた直径0.4~1.0cmの琥珀玉がある。当遺跡から出土した鏡は、昨年度調査で出土した重圏文鏡・獣形文鏡を含め、合計3面となる。

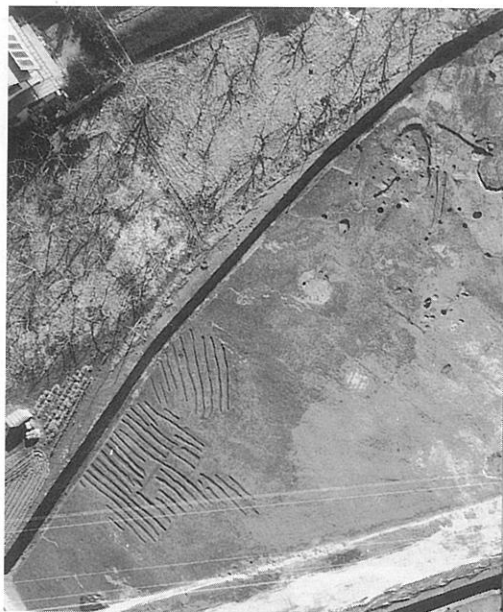
奈良・平安時代については、非常に多くの遺構が検出・調査されている。その中で平安時代としてはめずらしい礫床墓SM7019・SM7021が調査され、SM7021の埋中土からは灰釉の花瓶がほぼ完形で出土している。また墨書や刻書土器の中には朱墨の「瓦」や刻書の「更」?などもある。

その他の出土遺物については、管玉・勾玉・ガラス小玉や黒曜石製のものを中心とする石鏃が多く出土している。

今年の調査では昨年の課題となっていた地震によっておこる液状化現象による噴砂跡の調査もおこなうことができた。当遺跡におけるこの調査をきっかけに、他遺跡においても調査がなされるようになったことは大きな成果の一つといえよう。



礫床墓 (平安時代)



窪河原遺跡全景（中世面）



窪河原遺跡 馬頭骨埋葬状況

窪河原遺跡

窪河原遺跡は、千曲川にかかる国道18号線の篠ノ井橋から南東へ約500mほどの所に位置する。地籍は更埴市大字雨宮字窪河原である。遺跡の範囲は、千曲川右岸の自然堤防上の微高地と、微高地西側の低地部に及んでいる。

本年度の調査対象となった微高地は「かないじま」と呼ばれ、洪水の常襲地帯であった当地区にありながら、比較的被害の少なかった場所にあたる。

基盤となる砂礫層までは地表下1.5～2.0mを測る。この砂礫層中からは磨滅した須恵器や黒色土器の破片が出土しており、平安時代のある時期までは、自然堤防の形成段階にあったと考えられる。

基盤層直上の砂層上面からは12世紀後半に比定される珠洲焼の甕が単独で出土しており、しだいに離水していく様子がうかがえる。しかし、この時期の遺構は確認されなかった。

13世紀後半～14世紀になると完全に離水し、墓や竪穴状遺構、畠などが残されるようになる。検出された遺構は竪穴状遺構2、墓址9、焼土址15、溝址5、畠址、土坑多数などであり、建物址が少ない点などから、村落の中心地からは離れた場所であったことが予想される。

注目されるのは、焼土址や炭化物の分布が多く認められ、周囲から銭貨や陶磁器片が散乱した状態で出土

した点である。焼骨などがまったく、ないことから、近くに存在する火葬墓の火葬施設とは考えにくい。しかし、村落や居館から離れた場所でありながら、青磁や白磁、銭貨などが多く認められることから、特殊な場として利用されていたことだけは確かであろう。

その他の出土遺物としては、かわらけ、すり鉢、鎌、砥石、火打石、筭などが認められる。

この微高地の西側低地部は、中世以降も島状の自然堤防が形成された地域にあたり、古い時期の水田址などは検出されなかった。

一部で認められた畦畔状遺構や水田土壌は、その下層で18世紀代と思われる染付け碗の破片が見つかり、また、この水田面をおおう洪水砂の一部が1847年の善光寺地震の際におきたと思われる噴砂によって切られている。以上の点から、この地の水田開発がはじまったのは、18世紀後半～19世紀前半と考えることができよう。

微高地上の墓址、焼土址は、試掘調査の結果から、ひろい範囲に点在する可能性を示している。今後、微高地上の調査が進むにつれて、本遺跡の性格が明らかにされていくものと考えられる。今後の調査が待たれるところである。



(左) 村東山手遺跡 石棺墓
(右上) 村東山手遺跡 S B 8 敷石住居跡
(右下) 村東山手遺跡 S B 9 敷石住居跡

村東山手遺跡

村東山手遺跡は千曲川右岸松代町大室地籍にある。奇妙山系の山麓崖錐地形の末端部に遺跡は立地し、前面は千曲川自然堤防の後背湿地となる。大室古墳群大室谷支群は本遺跡に重なり谷奥から山腹に広がる。

調査は昨年度の調査を受けて、4月5日から10月12日まで実施した。調査面積は15,500㎡である。

検出された遺構は縄文時代中期末から後期前半にかけての敷石住居址12軒、土坑81基（縄文早期、中期末から後期前半の石棺墓・埋葬人骨を伴う土壇墓などを含む）、奈良時代墳墓1基、平安時代住居址3軒などである。出土遺物は縄文時代草創期から後期にかけての土器、石器、土・石製品、弥生時代・奈良・平安時代の土器などと多様である。敷石住居址は尾根状に伸びる高位面から低位面に移行する地点に構築されており、高位面を環状に囲むように分布する。一方、石棺墓や土壇墓は高位面に位置しており、いわゆる環状集落を呈する。

敷石住居址で最も遺存状態良好なS B—08は4.5 m程の主体部に小さな張り出し部を持つ柄鏡形の住居址と想定される（写真上）。敷石は銀杏の葉状を呈する。方形に区画された張り出し部から幅の狭い連結部敷石が伸び、主体部は奥壁に向かって鈍角で直線的に開く。連結部と張り出し部には一対づつの立石があり、その

幅は約40cmである。

S B—09は住居址廃絶後に廃屋墓として用いられた住居址で、仰臥屈葬の姿勢で抱石をされた人骨が炉の脇で検出された（写真下）。敷石は炉周辺と周縁部に僅かに残存しているだけである。住居址廃絶後床面の敷石を片付け遺体を埋葬したのであろう。埋葬された遺体は壮年位の男性と思われ、遺存状態は良好である。

石棺墓は長軸1.2 m、短軸0.6 mの方形に板状の礫を組んだもので（写真左）、長軸では2枚、短軸では1枚の礫を用いている。人骨の遺存状態はあまり良くなく、頭骨・大腿骨などが一部残存していただけである。土壇墓は直径1～1.5 mの円形で土壇底面に遺体を埋葬している。

次に出土遺物で注目されるものを幾つか紹介したい。まず、縄文草創期の土器の出土があげられる。口縁下より「ハ」の字形の爪形文が施文される土器で善光寺平では初めての出土である。縄文後期ではS B—08から注口土器の完形品が出土している。そのほか、後期前半堀之内式期の土器が多数出土している。石器では石鏃などと共に扁平な川原石を利用した石錘が約30点出土しており、生業活動の一端が窺い知れる。

縄文後期前半期を中心とした集落が、居住域と墓域を含めて明らかにされたことは意義深い。出土遺物も後期前半堀之内式期がまとまって出土しており、北信地方における該期に好資料を提供することとなろう。



春山B遺跡全景

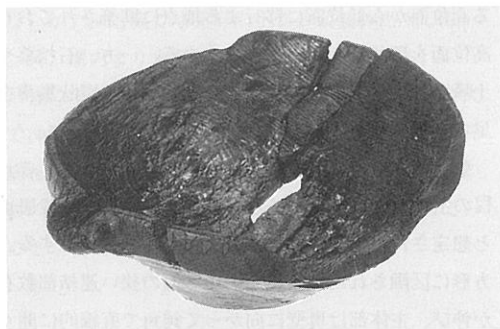
春山B遺跡

春山遺跡と春山B遺跡は、上信越自動車道の建設にともなう一連の緊急発掘調査事業として本年4月より発掘調査を行なった遺跡である。本年度の発掘調査面積は、両遺跡合計で18,450㎡で、残りの6,850㎡分は平成4年度以降の継続調査予定とされる。

春山B遺跡 本遺跡は、周知の春山遺跡(春山地籍)の南西方向へ広がる遺跡として、平成元年度長野県教育委員会文化課による試掘トレンチ調査の結果確認された。本遺跡の名称は、旧地形に立地する集落跡が春山遺跡と環境的に異なる点を考慮し、区別して付けられたものである。検出された弥生時代中期から後期の遺構は、現田中地籍の最東端・自然堤防の末端部に位置しており、その分布状況からして居住域は田中地籍が位置する微高地上に広がりが想定される。特筆すべき弥生中期の遺構としては、弥生中期中葉の土器をともなう方形プランの住居跡や弥生中期から後期の過渡期の土器が出土した焼失住居跡からは未使用品を含む太型蛤刃石斧が8本と鉄斧が出土しており、注口土器の出土する住居跡も現われている。さらに鉄石英製の管玉やその未製品と石器・剝片を多量に含む玉造工房とを兼ねる住居跡、紡錘車が多量に出土した住居跡からは床直より発見した石庖丁の半欠品とこれより70mほど離れた別の住居跡の覆土中より出土した石庖丁の半欠品とは見事に接合するなど興味が持たれる。弥生後期の遺構からは、一辺11mで柱穴6本を持った大型住居跡、長軸方向の両壁面沿いに内側へ張り出すベッド状遺構の住居跡、床下施設としてU字形の溝を設けた例が認められた。このほか井戸が構築されるのもこ

の弥生後期の集落にともなうもので、数基が存在する。この内の集落沿いからは、丸太をくり抜いた井戸枠内より多数の土器片を含むものや舟一隻分を数枚の板に割ったものを井戸枠として使用しており、この時代の井戸の構築技術を知る上で注目される。また焼土や炭化物の広がりや土器集中箇所が50ヶ所にものぼる祭祀的性格の空間が集落域と生産域の境に存在したことも興味深い。特記遺物としては、祭祀用具として住居跡より出土した鉢形高杯、甌、甕のセット、床直より出土した漆の付着した布や銅釧があげられ、微高地と水田域の境に接する住居跡からは木製工具の柄やほぼ完形の木製漆塗りの片口鉢が出土している。この鉢は赤漆で塗り、器の縁を黒漆により「鋸歯文」の模様で飾られていた。弥生後期末に入るとこの地域の様相は一変する。集落の姿は消え、変わって墓域が位置づけられる。検出された方形周溝墓は14基を数える。

春山遺跡 今回の発掘調査では、春山遺跡は認められなかったが、春山B遺跡との境界に相当する流路跡を発見することができた。



木製片口鉢



前山田遺跡全景

前山田遺跡

前山田遺跡は長野市若穂綿内字菱田に所在する。上信越自動車道の城の峰をぬくトンネルの須坂側の坑口にあたる。

検出された遺構の時期については、15世紀から20世紀にかけてのものであるが、その中でも15世紀後半頃から16世紀前半頃を中心とするもの、17世紀代を中心とするもの、19世紀代及びそれ以降とするものが大きな画期としてあげられる。

遺跡は城の峰北側斜面につくられたテラス部分とその北側から東側に広がる平坦部に限られ、今年度調査区の北側に遺跡の広がりを確認するトレンチを入れたが、遺構の確認はされなかった。

この地の地山は黒褐色の粘質土であるが、基本的にこの地山の上に整地土が盛られたり、あるいは整地土や黒褐色粘質土の上に遺構がつくられたり、掘り込まれたりしている。

この地に本格的な人の手が増えられ始めたのは15世紀後半から16世紀前半頃と考えられる。この時期に伴う遺構は、城の峰の斜面に人工的につくられたテラスや平坦部分の平部①・②の柱や杭列、そして平部②の石垣があげられる。この平部②の石垣よりも東側にはこの時期の遺構らしきものはない。特に平部②の石垣西側では黒褐色粘質土中に密集した状態で柱や杭が出土し、またこの土中に建築部材が横たわった状態で出土している。

平部①では多くの柱や杭の中で直径20cmをはかる柱による1間×4間の建物が検出されている。

テラスの構築については、地山の黒褐色粘質土の上

面から盛り土がされており、その構築時期の一つの手がかりとなろう。このテラスの上面には石で四角く囲まれた建物基礎跡があり、その奥には土盛りの小テラス、そしてその小テラスのふちにはこぶし大の石が並べられ、これに続く形で城の峰の山すそにそって人頭大前後の石を積んだ石垣がつくられている。検出されたテラス上の遺構がテラス構築時のものであったかどうかは判断しがたい。

この時期の出土遺物は、中国産の青磁・珠洲焼・瀬戸美濃焼・内耳鍋・かわらけ・古銭などがある。

そして次の17世紀代を中心とする遺構は、平部①・②・③において石を面的に広く敷きつめたような遺構や、石や石臼がつまった土坑状の遺構、そしてこぶし大前後の石を並べ建物の基礎の一部としている遺構などがある。それぞれがどのような性格のものであったかは検討を要するが、それぞれが建物に関係していたことは想定されよう。

この時期の出土遺物は、唐津焼・志野焼・瀬戸焼・内耳鍋・石臼・古銭などがある。

テラス上面の建物跡付近から唐津焼の完形品が出土している。建物跡の時期を示すものなのであろうか？

この後の遺構については撓乱により明確な遺構の確認は少なかったが、特に19世紀から20世紀代中頃までのものについては建物の礎石や暗渠、そして現存する観音堂の建てかえ以前のものに関係するであろう石製旗立てが検出された。

この時期の出土遺物は、伊万里焼・常滑焼・瀬戸美濃焼・松代焼などがある。

上記に示した時代よりも以前の遺構については一つだけ検出されている。それは60cm前後の石を3つ伴い完形の甕がたてに埋められたものである。その性格については不明である。当地では単発的なものであり、

周辺遺跡との関係で理解した方がよさそうである。出土した甕は北信地域特有の砲弾形のものであり、時期的には10世紀代と考えられる。



北の脇遺跡全景

北ノ脇遺跡

北ノ脇遺跡は長野市若穂地区に所在し、城ノ峯と呼ばれる奇妙山系の一支尾根の脇にある。遺跡の現地形は低地に面し、背後に山をひかえた緩斜面となっている。ここでは中世末と弥生後期を中心とする遺構が検出された。

中世末の本遺跡をめぐる歴史的環境として、背後の尾根づたいに春山城（綿内要害）が位置することは注目される。該期の地形は現況と余り変化ないが、緩斜面に大きな段差を持ち、2段のテラスになる部分がある。遺構は2段のテラス間に礫混りの土を配した道跡とも思われる遺構があり、この両脇に14棟前後の掘立柱建物址が検出された。又、低地境に巾約4mの溝が検出された。この溝の一端の立ち上がり調査範囲内で確認できたが、もう一端は調査区外へ延びている。出土遺物では焼物として青磁・白磁・大窯製品の碗・四類、在地産の土器四、内耳鍋、香炉等があり、金属製品では銅銭、石製品では白・茶臼・鉢・五輪塔の一部、木製品では柱、曲物、漆碗等がある。本遺跡は近

年センターで調査された山際のいくつかの遺跡と出現時期が近接しており、該期のこの地域の状況を考える資料として注目される。

弥生時代の本遺跡は河道に面した平坦地にあたり、この河道をはさんで春山B遺跡が位置している。この地形上で検出された遺構には溝と土坑、多数の柱穴状の小土塚が検出された。溝は河道と山に併行して走り、この周囲に小土塚が散在して検出された。出土遺物は少ないが、河道脇で略完形の土器が数個体出土している。又、溝内より木製の柄破片が出土している。

最後に本遺跡の地形形成についてである。弥生時代まで沖積地の土層が山際まで及んでいたが、それ以降山崩れ土が増大し、特に古墳～中世に致る間に大量の土砂の堆積があり、現地形のような緩斜面となることが判明した。



大星山古墳群第3号古墳

大星山古墳群

大星山古墳群は保科扇状地の扇端部に突出する尾根の頂部、平坦地からの比高40mほどの位置にある。調査地中央には石仏を納めた石の祠があり、虚空蔵山とよばれて信仰の対象ともなっていた。調査は前年度の確認調査により知られていた2基の古墳を中心に丘頂部のほぼ全域におよんだ。その結果4～5世紀の古墳4基、墳丘裾部の石棺1をあきらかにした。

4世紀末と考えられる3号墳は尾根突端にあり、径16mの円墳である。主体部はふたつある。第1主体は長さ約5m、幅1mで床より30cmほどの高さから2段ほどの石積をして側壁を構築する。蓋石の存在も考えられず、通常の竪穴式石室とは異なり石椀状のものと思われる。床面は舟底状で、鉄剣1・鉄鏃5・やりがんな1・ヒスイ製勾玉1・ガラス小玉33・砥石1、弓飾鉄1などを、石室上面から器台1を出土した。第2主体は長さ約2m、幅0.4mの板石積石室であり、平坦な床から鉄剣1・管玉3を出土した。墳丘中段には葎石がめぐる。

1号墳は周溝外縁間で一辺21m、内縁間17mほどの方墳である。中・近世の墓地・祠の造成によって一部変形を受けているが、東側以外には周溝が残り墳形を確認できた。尾根軸方向に長さ5.2m、幅0.8mの第1主体、これに直交した方向に長さ4m、幅0.7mの第2主体がある。いずれも破壊、盗掘を受けているが、前者より鉄剣2・鉄鏃6・やりがんな1・滑石製白玉

67、後者より刀子1・鉄片・滑石製白玉4を出土した。第1主体は玉砂利敷の礫床で、第2主体は岩盤を掘りくぼめて床とする。いずれもU字状の断面形を呈する。墳丘の中段には幅1mほどのテラスがあり、周溝部分とともに、底部穿孔の有段口縁壺と高杯を多数出土した。

4号墳は径16mの円墳と推定される。墳丘全体に大形の礫が散布し、積石塚状を呈する。長さ5.7m、幅0.6m、高さ0.6mの竪穴式石室は板石小口積で、墓壇の構築法も含め入念に造られている。盗掘されており、平坦な床より鉄剣1・やりがんな1・滑石製白玉8、ガラス小玉1、周辺より石製紡錘車1・高杯・壺を出土した。

2号墳は後世の改変のため墳形が明確でないが、北側裾に直線的な周溝を残すことから一辺15m程度の方墳と推定される。主体部は屋根形天井の組合式箱形石棺で長さ2.1m、幅0.7m、玉砂利敷である。礫床上より直刀1・鉄鏃13・やりがんな2・のみ1・金銅製くちなし玉3・滑石製白玉11、周溝中より底部穿孔壺、主体部周辺より高杯などを出土した。

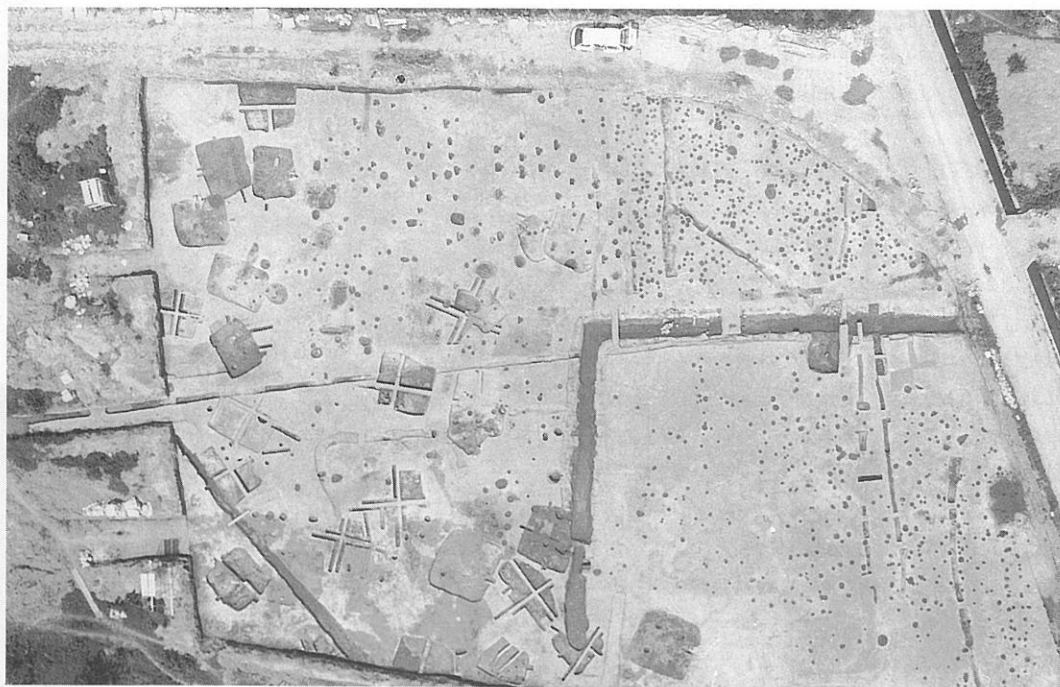
2・3号墳の間の東側に、幅0.3mの小形の組合式箱形石棺がある。遺物はない。

これらの年代観は現在のところ4世紀末から5世紀後半の間に3・1・4・2号墳の順におこなうことができる。



(上)大星山古墳群第1号古墳

(下)第2号古墳遺物出土状態



榎田遺跡①—1 全景

榎田遺跡

榎田遺跡は長野市南東部の綿内地区に所在する。千曲川右岸の自然堤防及び後背湿地にあり、標高は330mである。本遺跡の南東には、小規模な扇状地があり、その扇端部に清水、大柳の集落が形成され、湧水も豊富である。この清水地籍には、数基の古墳が存在する。

上信越自動車道建設に伴う調査で、用地内対象総面積は28,800㎡、南北約900mに及ぶ遺跡であるが、平成元年度4,000㎡、平成2年度19,400㎡を調査した。残りは平成3年度以降の予定である。

平成元年度調査区の①—1区は中世遺構の調査面を終了し、古代面は一部調査で中断したが、古墳時代2軒、奈良時代3軒、平安時代22軒の竪穴住居址と室町時代の掘立柱建物跡4棟、古墳時代～近世の土坑1,153基等を発掘した。調査区北半部には、L字状に走る溝に囲まれた環溝屋敷の一部が存在し、環溝内では多数の柱穴が検出され、相当規模の掘立柱建物跡数棟に分離されそうである。柱根を残すもの、漆器碗を埋納するものもある。溝からは青磁片・内耳鍋・かわらけ・漆碗などと共に馬形木製品が出土した。遺物からみて、15世紀後半の遺構と考えられ、西500mにある小柳井土氏居館跡と関係の深い名主級の屋敷ではないかと推定している。

本年度調査では竪穴住居址384軒、溝159条、掘立柱建物跡26棟、焼土址10、遺物集中区4、土坑2,668

基等を確認した。

弥生時代・中期栗林Ⅱ式期の集落が②—3A区、③—3・4区の2ヵ所に存在した。前者では16軒の竪穴住居址が検出された。後者では西側の沼地に沿って7軒の竪穴住居址が配置され、この住居址群を断面V字状の深い溝が囲み、その外側に25m離れて浅い溝がめぐらされる。小規模ではあるが、二重の溝に囲まれる典型的な環濠集落の形態を示し、遺物も相当量出土している。

弥生中期から後期の間に1m程の間層を挟み、激しく堆積が進んだことを示すが、弥生後期～平安時代の遺物包含層は20～30cmで、本遺跡は安定した居住域となったと思われる。

後期には竪穴住居址が①—1区で1軒、②—2C区で13軒、②—3A区で10軒が発掘され、遺物はほぼ全域で検出されている。ただし、南端の③—4・5区は墓域となり方形周溝墓1基、円形周溝墓2基が確認された。

匙形土製品、銅鐻各1点が特記遺物である。

古墳時代・竪穴住居址は339軒を数えるが、遺跡中央の②—3C区の139軒を筆頭に全範囲に分布する。整理途中にあるため細分は不可能であるが、4世紀～5世紀前半の集落は中央南よりの②—2C～②—3A区に営まれた。

以後、居住域は次第に拡大し、中核部は移動するが、後期には本遺跡全域に遺構が分布し、最盛期を迎える。

清水地籍の古墳群との関連で注目されよう。

住居址から勾玉・管玉・白玉の出土例が多く、また、子持勾玉の出土は特記に価する。

①-5区の千曲川旧河道跡から、後期遺物に伴出して下駄が出土した。

奈良・平安時代・堅穴住居址は②-2C区で2軒を確認したが、昨年度調査区に比し、遺物量も少ない。ただし③区では9世紀後半の遺物、種類も豊富で注目される。陰刻花文のある碗を含む緑釉陶器片や「甕」と書かれた墨書土器片が多数出土し、「饒益神寶」奈良時代からの伝世品と思われる帯金具（丸柄、巡方）が出土した。付近の土坑からの漆碗も、この時期のものと推定され、近くに有力者を中心とした村落の存在が想定される。

中世以降 室町時代の内耳鍋片が少量出土しているのみであるが、②-2C区では数棟の掘立柱建物址が発見されているが、切り合いでは古墳時代より新しいとしか言えないが、構造からみて、中世以降の可能性が強い。



(右)榎田遺跡③全景

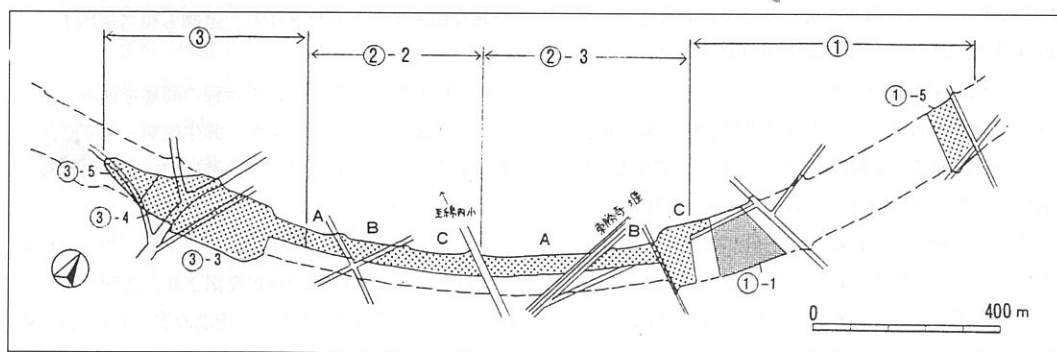


図1 榎田遺跡調査区

あとがき

平成2年度の長野調査事務所の発掘調査も一段落し、松原、榎田遺跡を残しほぼ終了した。発掘調査を実施した各遺跡については、現地説明会、「善光寺平を掘る」と題して行なった発掘調査出土品展で既に公開したところであるが、本号はその概略を特集した。

松原遺跡、川田条里遺跡については、編集の都合上、次号にまわさざるを得なかった。

善光寺平を代表する大遺跡の調査が終了し新しい多くの知見を得た。松原、篠ノ井、榎田、春山B等の各集落遺跡、石川条里、川田条里等の水田調査。来年度は整理作業も本格化の予定である。